

令和7年度 新川みどり野高等学校アクションプラン -1-	
重点項目	学習活動（教科指導）
重点課題	生徒の実態に即した適切な受講登録とわかる授業の確立
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・本校には不登校経験者が多く、基礎学力が定着していない生徒がいる。 ・様々な理由から、転入学生や編入学生が在籍している。 ・進路希望は就職希望から四年制大学への進学まで多岐にわたる。 ・学習への目的意識に乏しく、安易な欠席や遅刻が見受けられる。 ・コミュニケーションが構築できず、グループ活動や意見交換が苦手である。
達成目標	講座出席率と単位修得率の向上
	講座出席率85%以上 単位修得率85%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校生徒や学習習慣が身に付いていない生徒が授業に参加できるように、学校全体で学習の支援にあたる。 ・多様な生徒のニーズに応じた、弾力的な教育課程の編成に努める。 ・ホームルームや面談を通じ、一人一人の目的に沿った無理のない受講登録を勧める。 ・生徒、教員（担任・授業担当者）、保護者との連携をとっていく。 ・ICT機器活用の推進を図り、タブレットやデジタルコンテンツ等を活用した教材開発に努める。 ・指導と評価の一体化を推し進め、校内外の研修を生かして授業改善に努める。
達成度	講座出席率 82.3%（昨年度 86.3%） 単位修得率 84.0%（昨年度 89.5%）
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数授業や習熟度別授業の中に中学校の振り返りを取り入れながら、生徒一人一人に応じたきめ細やかな指導を行った。 ・年間指導計画の中で学習のねらいと評価規準を教員と生徒の間で共有し、生徒が主体的に学べるように努めた。 ・カリキュラムポリシーに基づき、各年次(夜間)や各教科との連携を図りながら、柔軟な教育課程の編成に取り組んだ。 ・時間割作成の際には生徒一人に複数の教員(年次、教科、教務)が対応し、生徒が無理のない受講登録をするように支援した。 ・技術支援員による校内研修を行い、タブレット等のICT機器の活用推進に取り組んだ。 ・互見授業を行ったりデジタル教科書を活用したりすることで授業改善に努め、生徒の学習理解が深まるように努めた。
評 価	C
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・長期欠席の生徒は、最終的にはどうなっていくのか。「来なくなったから仕方ない」ではなく、登校できない理由を掘り下げて、登校につながるような対応、支援をしていただきたい。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・「わかる授業」の確立を目指し、互見授業等を活用して、授業改善に努める。 ・技術支援員による校内研修を通じて、タブレット等のICT機器の活用推進や、授業で使用するメディア技術の習得に努める。 ・多様な生徒のニーズに対応できる、柔軟な教育課程の編成に努める。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。)

重点項目	学校生活（保健指導）	
重点課題	保健厚生委員会活動の活性化	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・保健厚生委員会では、5 S活動の実践を通じ、生徒が主体的に参加できる仕組みづくりを進めている。昨年度は、校内美化活動をきっかけに、整理整頓の啓発や清掃状況チェックリストの活用など、生徒が学校環境の改善を実感できる活動を行ってきた。 ・昨年度は約8割の生徒が、ゴミ分別に積極的に取り組んでいる一方、一部で分別の誤りや意識の低さが見られる。 ・生徒のアンケートや委員会生徒の意見から、学校環境や生活習慣に関する改善要望が生徒側から寄せられており、これらを「生徒目線の課題」として捉え、委員会主主導で検討・解決していく体制が必要である。 	
達成目標	保健厚生委員会の生徒が中心となり、生徒全体の保健衛生・美化に関する意識を高める活動を、年間5回以上企画・運営する。	
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・保健厚生委員会や生徒アンケートで収集した意見や課題を基に、生徒自身が解決策を考え、実行する活動を企画・運営する。例えばゴミ分別では、継続的なチェックと結果分析を行い、課題に応じた解決策を考え、実行する。また、視覚的にわかりやすい分別表示の整備など、学校全体の衛生的な環境づくりも並行して進める。 ・活動の成果を文化祭や学校保健委員会等で校内に共有・発信することで、保健厚生委員会の生徒はもとより、全校生徒の保健衛生意識を高めるとともに、協調性や主体的な行動力を養う。 	
達成度	目標の年間5回に対し、年度末の実施予定分を含め計6回となる見通しであり、目標を十分に達成した。	
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・校内美化活動：前期・後期に各1回実施。点検項目を生徒自身が見直したほか、清掃中には生徒目線でモチベーションを高める「ワンポイントアドバイス放送」を行い、前向きに取り組める雰囲気づくりを工夫した。 ・学校保健委員会：アンケートで全年次共通の課題として挙げた「睡眠不足」に対し、保健厚生委員の生徒目線で改善策を検討した。自ら実践可能な対策を考案・実施し、全校生徒を対象にその成果をプレゼンテーション形式で発表した。 ・地域環境美化活動：保健厚生委員は開始・終了式の進行や、用具の準備・片付け等の運営実務を主導し、行事全体を支える役割を担った。 ・文化祭での展示発表：地域環境美化活動の様子や日々のゴミ分別チェックの集計結果を担当年次ごとに掲示し、全校生徒への意識啓発を行った。 ・その他の自主活動：生徒発案によるベルマーク収集活動が新規に提案されており、実施の可否や方法について協議する予定である。 	
評 価	A	
学校関係者の意見	学校全体の方針である「生徒の主体性を伸ばす取組」を実践している点は評価できる。引き続きこの流れを継続していただきたい。	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度も生徒が自ら考え、活動できる場面や機会を継続的に設定する。 ・保健厚生委員会の取り組みを全校へ発信して協力を呼びかけるとともに、より良い活動になるように活動の成果を生徒自身が確認できる環境を整える。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。)

重点目標	進路支援（進路指導）	
重点課題	生徒一人一人が主体的にキャリア形成と自己実現を目指しながら、目標に向かって実践できる進路指導（支援）体制を構築する。	
現状	本校の生徒は集団および社会的活動の経験値が乏しいことにより、自己理解や自己肯定感が低い生徒が多い。就業体験は生徒にとって自分自身の成果や課題が明確になることで、自己理解および自己肯定感の向上に大きく役立っている。これまで参加した生徒の多くは、進路実現の方向性が定まることで卒業後の目標が明確になったり、本校のスクール・ポリシーの「目標に向かって頑張る」ことへ繋がる貴重な機会にもなったりしている。こうした取組は、今後も地域の事業所と連携しながら学校全体の取組として定着させたい。	
達成目標	自分の適性に合った業種や事業所等での就業体験を、卒業年度を迎える前までに経験した上で、卒業年度就職活動に臨む。 ・次年度卒業予定生（就職希望者）の就業体験の参加率：100% ・1年次生（就職希望者）の就業体験の参加率：70%以上	
方策	<ul style="list-style-type: none"> ・就業体験を学校全体での取組として職員への周知と協力体制を充実させると共に、生徒への情報提供等の充実を図る。 ・例年実施している「就業体験報告会」を、より効果的になるような実施時期の工夫や内容の充実を図る。 ・特別支援対象生徒の就労支援についてはこれまでと同様、本人の実態に合った進路実現に繋がられるよう、早期の対応・保護者との連携・実態に応じた就業体験の参加等を、通級担当者や関係外部機関と連携しながら進める。 	
達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度卒業予定生（就職希望者）の参加率：100%（12名中、12名） ・次年度以降に卒業予定の生徒（就職希望者）の参加率：56%（16名中、9名） 	
具体的な取組状況	生徒が主体的にキャリア形成や自己実現を目指せるよう、「キャリアパスポート」や「みどり野メソッド」を行事や学期ごとに実施した。これらの取組については、状況や成果、課題などを必要に応じて保護者と共有することで、学校と家庭が連携して生徒を支援できる体制づくりにつながっている。 就業体験では、上級生が下級生に向けて就業体験報告を行い、その意義や成果を伝えたことで、多くの1年次生が参加するようになった。また、近年は就業体験の実施が定着し、多くの教員がその意義や成果を実感しているため、生徒への参加促進の指導もより行き届くようになってきている。	
評価	B	
学校関係者の意見	就業体験は、不登校経験を含む多様な課題を抱える生徒にとって、社会経験を積むうえで大変有意義な取組である。また、学校と地域社会との連携を深める点でも大きな効果がある。今後もぜひ継続して実施してほしい。	
次年度へ向けての課題	本年度は、卒業予定の就職希望生については目標を達成したものの、在校生の参加率が目標に届かず課題が残った。今後は、就業体験の意義を在校生へさらに周知するとともに、キャリア推進の中心となる2年次生については、進学予定者も含めて参加を促し、次年度は取組を一層強化していきたい。	

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。）

重点項目	特別活動
重点課題	特別活動を通して、協働的・自発的に活動できる生徒の育成を図る。
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・教師からの指示に従って活動したり、基本的な生活習慣が身に付いていなかったりする生徒が多く、その為に授業や特別活動を欠席する生徒が見られる。 ・学校行事やホームルーム活動、生徒会活動や委員会活動において、他の生徒と協働しながら自発的に活動するような経験が乏しい生徒が多く見られる。
達成目標	「様々な特別活動に自発的に参加する、互いのよさを生かしながら協働して活動する、他の生徒や教師と望ましい人間関係を形成する」という目標を達成するため、ホームルーム活動や生徒会活動、学校行事や部活動において集団的、体験的な活動の充実を図る。
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事（特に、スポーツフェスティバルや新川キャンパスフェスティバルにおいて）では、その準備活動期間や当日活動において、それぞれ生徒の実態に合わせた活動計画を立て、自発的・協働的な活動を促すようにする。また、事後アンケートを行って自らの活動の振り返りを行わせる。 ・ホームルーム活動では、話し合いや他者と協働して活動する経験を通し、ホームルームの一員としての役割を自覚させ、協調性やコミュニケーション能力を身に付けさせる。 ・生徒会活動や委員会活動では、その活動に自発的に参加しようとする意識を高めさせるとともに、学校生活をよくするための課題を見出して話し合いを通して合意形成を図るような活動を促すようにする。 ・ボランティア活動では、その活動の意義を理解して自発的に活動に参加する生徒を増やし、社会奉仕の精神を養う体験が得られるようにする。
達成度	事後アンケートの結果、目標に即したスローガンを意識して行事に参加した生徒の割合が高かった。自由記述においても「協力できた」「計画的に活動できた」等の回答が得られており、多くの生徒が特別活動に対して肯定的に取り組んでいたことが確認できた。
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事においては、各行事のスケジュールを見直したり、行事で使用する備品の管理を見直したりした。また、活動計画やスローガンを早期に提示することや、活動予定を教員、生徒が共有することで、ホームルーム活動等において見通しを持って活動に取り組めるよう支援した。 ・生徒会活動においては、生徒が学校に来ることを楽しみに感じるとともに、人との関わりを広げるきっかけづくりを目的として、執行部による独自の企画を立案・実施した。また、各委員会と執行部が連携して学校の課題について協議する場を設けるなど、生徒相互の協働的な活動の推進を図った。 ・ボランティア活動においては、掲示板等で周知を行い生徒の参加を募った。昨年度よりは延べ人数は減少したものの、意欲的に複数回参加する生徒も見られた。参加者の拡大が今後の課題である。
評 価	B
学校関係者の意見	新川キャンパスフェスティバル当日は各企画や展示が賑わい、体育館ではイベントも開催されるなど、生徒が主体的に活動している様子がよく伝わる、活気のある行事だった。
次年度へ向けての課題	学校行事において、目標を意識して活動できた生徒の割合は高いものの、昨年度と比較すると改善の余地も見られる。生徒が見通しを持ち、役割を意識して参加できるよう、準備・運営・振り返りの過程をより一層充実させる必要がある。生徒会活動・委員会活動については、引き続き学校生活や各委員会の課題について話し合う場を設定し、生徒主体の取組を継続・発展させていきたい。また、ボランティア活動については、活動の意義や魅力の発信を工夫し、参加者の拡大を図ることが課題である。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。)

令和7年度 新川みどり野高等学校アクションプラン - 5 -	
重点項目	福祉教養科
重点課題	家庭・福祉への興味・関心を向上させ、家庭・福祉に関する知識・技術の習得を図るとともに、福祉教養科での学びの達成感や充実感を高める。
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭・地域における生活体験の希薄化により、家庭に関する基礎・基本が定着しにくく、意欲が乏しい生徒が増加している。 ・教育課程において、様々な家庭に関する専門科目（被服、食物、住居、保育、福祉など）や福祉に関する専門科目を設定し、生徒それぞれの興味・関心や進路希望に対応している。 ・家庭・福祉に関する専門科目において、実習や体験、専門家による講義等を計画的に取り入れ、専門性を高めることができるよう取り組んでいる。 ・福祉施設との交流活動など、家庭クラブ活動を継続的に実施している。 ・3年次生を対象に介護職員初任者研修を開講している。
達成目標	家庭・福祉への興味・関心の向上、家庭・福祉に関する知識・技術の習得に向けた指導体制の充実・改善を行う。
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・専門科目全般の授業において、体験的な学習や生活産業の専門家を招いた授業の実施など、学習指導の充実を図る。 ・授業以外においても、家庭クラブ活動や、福祉施設での校外実習、福祉教養科合同ホームルームでの体験的な講座や交流活動の充実を図る。 ・家庭・福祉への興味・関心の向上、家庭・福祉に関する知識・技術の習得を目指すとともに、生徒自らが家庭や福祉を学ぶ意義について考えさせ、福祉教養科での学びの達成感や充実感を高めさせる。 ・1年次生から介護職員初任者研修の資格取得に向けた働きかけを行う。
達成度	指導体制の充実・改善を実施できた。
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・専門科目の授業では、生活産業の専門家を招いた講義や実習、体験的な学習など、学習指導の充実に努め、学科に関連する生活産業や職業を具体的に理解させ、専門的な学習への意欲を高めさせるとともに、関連する知識や技術を習得させることができた。 ・昨年度に引き続き、家庭クラブ活動や福祉教養科合同ホームルームで、特別養護老人ホーム新川ヴィーラやグループホームしんきろうハウス、わかくさ作業所の利用者さんと交流を行った。生徒が考えたレクリエーション活動を施設で実施させていただいたり、運動会の活動などの補助をさせていただいたりするなど直接交流することを通して、福祉を学ぶことの意義を考えさせるとともに、達成感や充実感を生徒に感じさせることができた。 ・1年次生から介護職員初任者研修の資格取得に向けた働きかけを行ってきた。来年度は1名が介護職員初任者研修課程の受講を希望している。
評 価	B
学校関係者の意見	・施設（新川ヴィーラ・わかくさ作業所）として協力できることがあれば、是非協力していきたい。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭・福祉への興味・関心の向上、家庭・福祉に関する知識・技術の習得を図り、福祉教養科での学びの達成感や充実感を高めることを目指して、さらに指導・支援を充実させる。 ・新川ヴィーラ、しんきろうハウス、わかくさ作業所の利用者さんとの交流を継続的に実施する。さらに、実施方法について、生徒の学びが深められるように、さらに検討していきたい。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。)